幸崎遺跡

―― 山口県山口市 ――

２０２１

防府考古学研究会

目次

はじめに

凡例

幸崎遺跡地図

高橋慎二資料

幸崎遺跡 1 地区 …… 1～2

幸崎遺跡 1A 地区 …… 3

幸崎遺跡 1B 地区・遺跡の写真 …… 4

幸崎遺跡 2A・2B 地区 …… 5

幸崎遺跡 2B 地区 …… 6～14

幸崎遺跡 3 地区 …… 15～29

幸崎遺跡 4 地区 …… 30～33

終わりに

はじめに　　石器の写真に思う

石器の実測図が書けないので、写真でやっているのも事実ですが、やれないことにこだわるよりは、やれることをやる方が人は幸せと思います。やれないこともたくさんありますが、やれることも私の手では持ちきれないほどたくさんあります。それでも、いざやるとなると簡単なものは一つもありません。

石器の写真はかなりやりましたが、やはり難しいが本音です。それでも、少しはわかってきたことがあります。一つは、背景の色である。完全な同色ではいけません。安山岩は、風化しているので撮り易い方ですが、新しい割れがあると黒の背景に消えます。背景の色は、黒・茶色・深緑など暗い系統をプリンターで撮って利用しています。段ボールの色も良い。

段ボールは、切れ目を入れて石器の側面を撮影する時にも使えます。石器の側面撮影の一番新しい方法は、玄米を小さな箱に入れて石器を安定させる方法です。これなら、どんな形の石器でも撮れますが、背景の色を考えると玄米を小豆に変えるとか改良の余地はあります。背景は、削除して使います。

石器が良く写る角度は、大体一つです。石器を回して良く写る角度を探します。良く使うのは斜め 50 度で、影は鏡の光で消します。難しいのは、水晶と黒曜石の細石刃ですが、良い撮影方法は見つかりません。

印刷は、実際の石器の色よりかなり隔たりがあります。実際の石器の色は、想像以上に黒く濃い色です。近づければ近づけるほど剥離や稜線が消えて、わけのわからない写真になります。適度に近づけることが大切です。シャープネス・明るさ・コントラスト・彩度・トーンを上手く使いこなせると少しは良い写真になります。いくら頑張っても、写真は写真で本物の石器にまさるものはありません。

凡例

１、実測図を入れている遺物があります。実測図は、昭和 43 年当時に、長沢考古研究グループの会員が鉄筆（ガリ版）で書いたものなので、原図に比べ良くありません。

２、モノクロの写真を入れている遺物があります。昭和 50 年頃に撮影されたものと思われます。デジカメで再生して見ましたが、上手くはいかないものです。それでも、ワードの技術はすごいです。図の修正をするとぼやけて見えない写真も少しは見えるようになります。

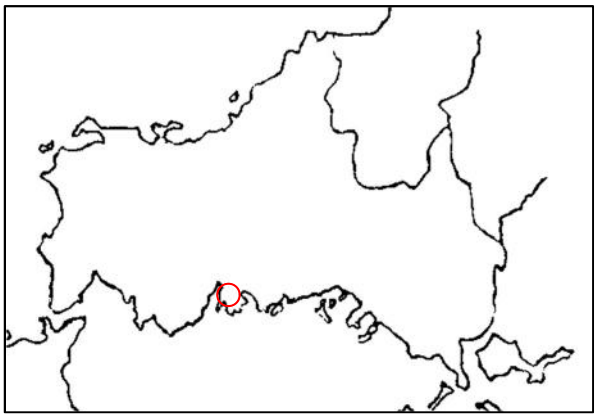
３、写真は、実物大を基本としています。パソコンの画面では、大きさを合わせていますが印刷をすると少し大きくなる傾向があります。今までは、微調整をしていましたが、この度は行いませんので完全な実物大ではないです。遺物の大きさと縮尺率を記入していますので参考にしてください。

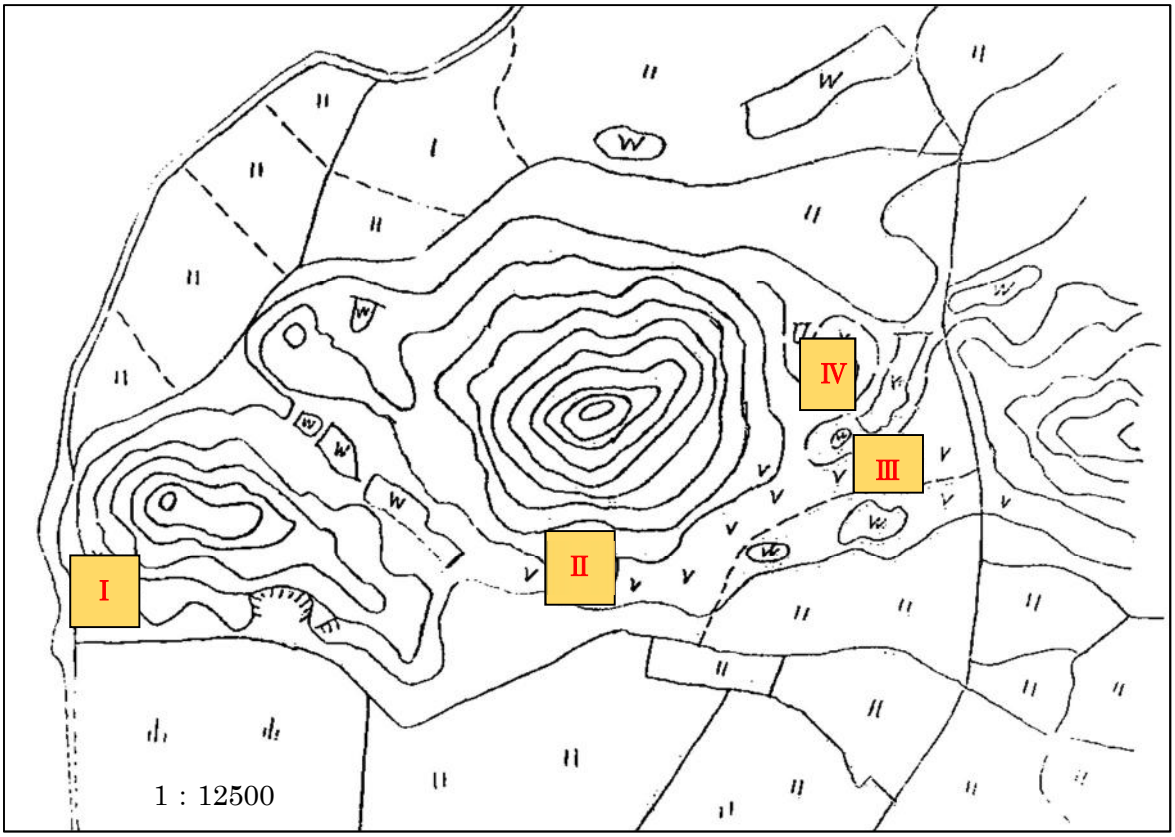
４、ページが変わると、どこの遺跡かわからなくなることがあるので「ナイフ KOUZAKI２」とページの右端に入れています。ナイフ形石器・幸崎遺跡・２地区を意味しています。石器の数がわかるように石器に番号も入れています。

5、火打石と思われるものが 1 点ありました。旧石器のチャート製の掻器・石核・クサビ形石器は、火打石に良く似ていますので注意する必要があります。

幸崎遺跡地図

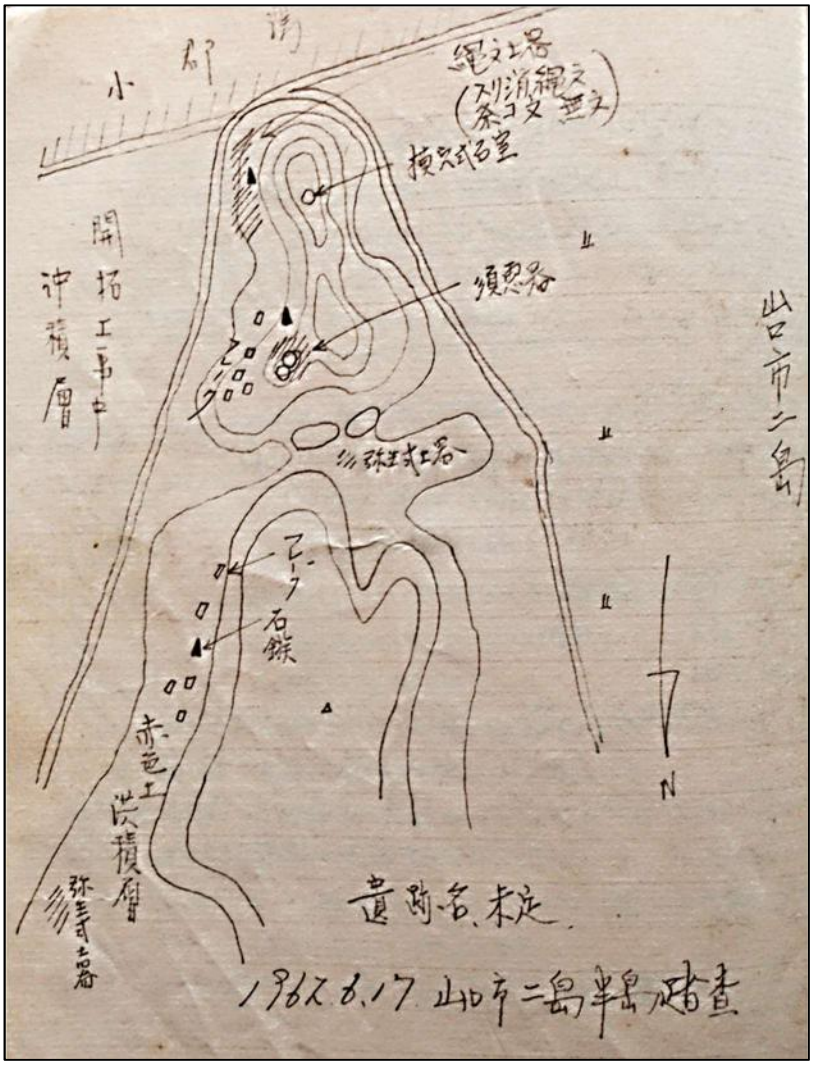
所在地
山口県山口市秋穂二島
幸崎遺跡１地区の対岸には、藤尾遺跡が
あります。南東を見渡すと、美濃ヶ浜遺跡の
ある丘陵が微かに弧の字状に細く延びています。

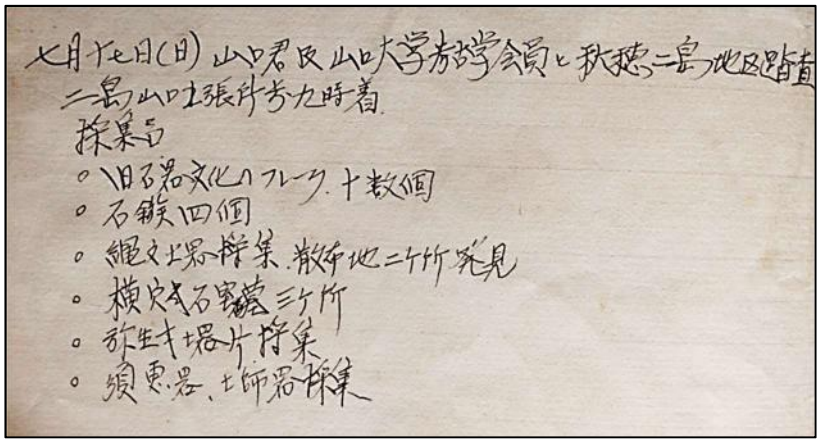




	緯度	経度	旧石器遺物
幸崎Ｉ海	34.033370	131.394735	石核？
幸崎Ｉ	34.034068	131.395344	旧石器？
幸崎ＩＡ	34.033277	131.396589	角錐状石器　石核
幸崎ＩＢ	34.033179	131.400108	剥片？
幸崎ⅡＡ	34.033268	131.403970	ナイフ形石器
幸崎ⅡＢ	34.033232	131.404936	ナイフ形石器　掻器　角錐状石器　石核　縦長剥片
幸崎Ⅲ	34.034632	131.408878	ナイフ形石器　台形石器　角錐状石器　掻器　削器　縦長剥片　細石核　細石刃　細石刃屑
幸崎Ⅳ	34.036446	131.408909	ナイフ形石器　縦長剥片

高橋慎二資料





幸崎遺跡が、1962 年（昭和 37 年）6 月 17 日に発見されたことがわかる資料です。下の資料に 7 月 17 日とありますが、ウエブで調べると 7 月 17 日は火曜日で 6 月 17 日が日曜日ですので 6 月 17 日が正しいと思われます。

幸崎遺跡

幸崎遺跡は山口市秋穂二島に所在する。遺跡は大江山 63m宮山 105m権現山 65mの山麓に点在する遺跡群で、東方の朝日山 80mを加えて 4 山が連なり西方の山口湾に向い半島状に突出し、椹野川と南若川が合流する河口にあたる。遺跡は、大江山南丘陵が 1 地区・宮山南丘陵の洪積台地が 2 地区・宮山と権現山が連なる尾根の洪積台地が 3 地区・宮山の東方にある洪積台地が 4 地区である。1 地区は、3 地点あり西から 1 地区・1A 地区・1B 地区とした。2 地区は、2 つの舌状台地からなり、西から 2A 地区・2B 地区とした。

遺跡名は、かなり曖昧で幸崎遺跡と言えるのは 1 地区のみである。地名を考慮すると 2 地区は二島宮山南遺跡・3 地区は二島南遺跡・4 地区は二島宮山東遺跡とした方が良いが、幸崎遺跡 1～4 地区の呼び名が知られているのでこのままにして置きたい。旧石器～古墳時代の複合遺跡で、大江山には数基の後期古墳があった。

幸崎遺跡は、昭和 37 年 6 月 17 日（日）秋穂二島地区踏査において高橋慎二氏などにより発見された遺跡である。手書きの地形図に遺物採集地点がノートに記載されていた。その時に発見されたのは 1 地区・1Ｂ地区・2 地区であり、3 地区 4 地区はその後発見されたものと思われる。3 地区 4 地区の区分は、昭和 50 年以後の事で、それ以前は 4 地区の事を 3 地区の「離れ」、略して「離れ」と呼んでいた。その様なことで、長い間遺物は区別されずにいたのである。

幸崎遺跡 1 地区　緯度経度①34.033370　131.394735　②34.034068　131.395344

本遺跡は山口市秋穂二島幸崎に所在する。大江山の西丘陵で周防大橋の近くにある。山口湾に面し、椹野川と南若川が合流する河口にあたる。①は、海岸で黒色黒曜石の円盤状石核が発見された。②の地点は、主に縄文時代後期（磨消縄文土器・スクレーパー・石鏃）などが発見されているが、旧石器の可能性がある遺物も採集されている。

幸崎遺跡 1 地区海岸

①円盤状石核
5.6×5.3×2.9　88.0ｇ
黒曜石

下端に新しい欠損があるので、もう少し大きいものである。
これほど大きな黒色黒曜石は、宇部台地で見たことはない。
打面側には、大きな原石面（円礫）がある。
これと似た円盤状石核は、美濃ヶ浜遺跡の海岸でも採集されている。
石材は、風化が著しく石材名までわからなかったが大きさは似たようなものである。

幸崎遺跡１地区で採集された旧石器の可能性のある石器

①石錐か基部加工のナイフ形石器

4.5×1.5×0.6　3.0ｇ　安山岩

見かけは、両端が鋭く尖るので双刃の錐に見えるが基部加工のナイフ形石器と思われる。右側面は、垂直素材面で基部に調整加工が認められる。左側縁は、先端部と基部に加工がある。基部の加工は、入念な刃潰し調整であるの対して先端部は浅い剥離で使用痕と考えられる。用途として、錐やナイフの利用が考えられる。

②ナイフ形石器

2.9×1.4×0.5　1.8ｇ　チャート

左側面は、ほぼ垂直に近い素材面で加工はない。右側縁に浅い調整加工が認められる。先端部は、欠損している。垂直素材面を利用することで、刃潰し加工を省略したものと思われる。

③小石刃

2.2×1.5×0.4　1.5ｇ

ガラス質安山岩

下端部は欠損している。

④縦長剥片

3.5×2.6×1.0　7.8ｇ

安山岩

縦剝ぎ剥片である。

⑤剥片

4.1×3.4×1.0　9.5ｇ

安山岩

上端部に原石面がある。

幸崎遺跡１Ａ地区　緯度経度①34.033277　131.396589　②34.033645　131.396366

本遺跡は山口市秋穂二島幸崎に所在する。大江山の南丘陵で周防大橋の東方 200ｍに位置する。幸崎遺跡１地区のすぐ近くにある。地形図からみると同一丘陵と思われるので、１地区としても良いかもしれない。1Ａ地区は山麓の丘陵を大きく削り出来た造成地で、一般的には遺物が発見され難い場所である。そのような遺跡は、周南市鹿野の天子遺跡も同様であるが遺物は複数発見されている。②の崖面で頁岩製石核１点と①の造成畑地でホルンフエルス製の角錐状石器が１点発見された。１地区は、縄文時代後期（磨消縄文土器）を主体とした遺跡で１Ａ地区の遺物とは性格を異にするが、縄文土器が発見される場所は台地の先端の一部に限れているため、その場所を外れると旧石器が発見されても不自然ではない。

①角錐状石器

6.3×1.5×1.6　15.0ｇ

ホルンフエルス

二面加工の角錐状石器で、正面下部に素材面を残している。細身で、先端は尖る。加工は、裏面からと稜状からなる。階段状剥離は、石質の影響と思われる。ホルンフエルスの石材の利用は珍しいもので、縞模様に特徴がある。

②剥片石核

3.1×3.3×3.8　45.5ｇ　頁岩

大きな打面調整はある。

打撃面と剥片の剥離面を除き、ほとんどが原石面（円礫）である。剥片剥離は、力が上手く下まで抜けず途中で止まり階段状になっている。

幸崎遺跡１Ｂ地区 緯度経度　34.033179　131.400108

１Ａ地区の東方にあり、幸崎古墳（1973）の報告書にあるＢ地区１号古墳のある丘陵上にあった。高橋慎二資料の須恵器と書いてある場所である。真砂土の強い開墾地で、遺物は安山岩の剥片が何点かあったが現存しない。剥片は、４～５ｃｍあるものもありました

昭和 43 年頃の幸崎遺跡 1 地区　遺跡は、画面中央に見える畑で、前方は海です。

昭和 43 年頃の幸崎遺跡 2B 地区です。遺跡は家の背後ですが、写っていません。
遠方にかすかに見えるのが美濃ヶ浜遺跡のある丘陵で細長く延びています。

幸崎遺跡２地区　緯度経度①34.033268　131.403970　②34.033232　131.404936

本遺跡は山口市秋穂二島南に所在する。宮山の南丘陵の緩斜面にある洪積台地で、周防大橋の東方１ｋｍに位置する。遺跡は２地点あり、標高は 15～20ｍである。①の地点は、安山岩製の切り出し型ナイフ形石器 2 点のみで、遺物の多くは②の地点で発見された。旧石器時代の遺物の他に石斧・石槍・石鏃が発見されている。①地点と②地点は、舌状台地が並列にならぶ台地で背後の緩斜面で繋がっている。便宜上①の地点を 2A 地区②の地点を 2B 地区とする。

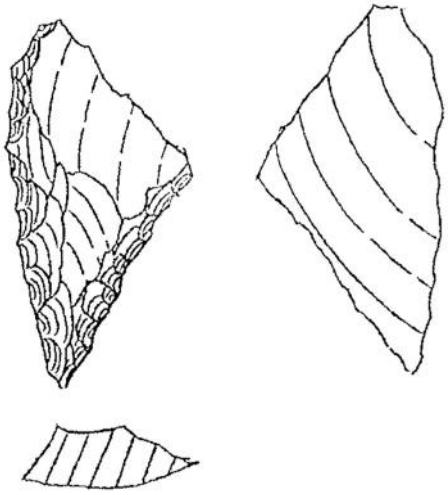
幸崎遺跡２Ａ地区

①ナイフ形石器
5.0×2.6×1.3　11.6ｇ
安山岩
厚みのある、横剝ぎ剥片を素材とした
切り出し型のナイフ形石器である。
先端部の欠損は古く、末端部の欠損は新しい。
加工は、大きな剥離と小さな剝離を駆使して
裏面から調整を施している。
裏面は、打瘤除去の調整が行われている。

②ナイフ形石器
4.7×2.3×0.6　6.9ｇ
安山岩
正面に稜線のある縦剝ぎ剝片を素材とした
切り出し型ナイフ形石器である。
加工は、入念な調整で仕上げられている。

幸崎遺跡２Ｂ地区

①ナイフ形石器
4.7×2.3×0.7
安山岩
縦剝ぎ剝片を素材とした切り出し型
ナイフ形石器である。
加工は、丁寧な調整剥離である。

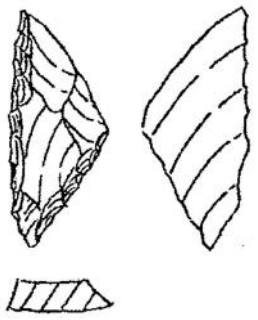


②ナイフ形石器

3.1×1.3×0.4

安山岩

縦剝ぎ剝片を素材とした小型の
切り出し型ナイフ形石器である。
加工は、丁寧な調整剝離である。



③ナイフ形石器

3.5×1.6×0.9　5.5ｇ

ガラス質安山岩

先端部と基部の欠損は古いもので、これ以上に大きい
ものかはわかりません。数少ない大きな剝離で調整加工
された二側縁加工のナイフ形石器です。

④ナイフ形石器

2.4×1.0×0.5　1.3ｇ

ガラス質安山岩

先端部がわずか欠損しているが、新しい割れです。
細かく丁寧に調整加工された二側縁加工のナイフ形石器
です。正面には、2 本の稜線があり刃部は急角度である。
風化が著しい。

⑤ナイフ形石器？

3.9×2.7×1.0　8.1ｇ

安山岩

ナイフ形石器か良くわからない
のは、左側縁の調整剝離が
刃潰し状でないからです。
上部の欠損は古いもので、調整
剝離から見ても、もっと大きなもの
と考えられます。縄文時代のスクレパー
の可能性もあります。

小石刃核 KOUZAKI　2B

①小石刃核

3.5×1.5×4.1　20.9ｇ

黒曜石

この石核には、理解できないことが

3 点ある。

1，打面が小さいこと

2，右側面の打面背後に二度の剥離

3，左側面の最終的な剥離（少し色が濃い部分）

1 は 2 に関係している。

2 が打面再生の失敗なら理解できるが

側面から剥離するだろうか。

右側面に見事な樋状剥離が見られる。

長さ 3.3ｃｍ幅が 6～8ｍｍである。

大きさ的には、細石刃でも良さそう

である。しかし、小石刃核から細石刃

が取れたとしても、それは細石刃であろうか。

石核 KOUZAKI　2B

①石核

4.0×5.8×3.5　89.5ｇ

頁岩

底面に少し角の取れた角礫の原石面が残る。

裏面には、自然で割れた面が残る。

主な剥離は 3 箇所である。最初の剥離は、天井部で最も

大きな剥離である。次は右側面で、最後が正面である。

角礫の平坦な原石面を底面として、石核を安定させ剥離

していることがわかる。

①掻器

5.7×3.8×1.9　42.2ｇ　流紋岩

3 本の稜線のある縦剝ぎ剥片を素材としている。
斜めの割れは、新しいもので熊手かそれに近いものが
当たり割れたものと思われます。
刃部の先端の剥離は大きく、その他は小さな剥離で
まとめている。本地域では、大きな部類に入る。

②掻器

2.3×2.2×0.5　3.0ｇ

安山岩

正面に稜線のある縦剝ぎ剥片を素材としている。
刃部が半円状ではないので、見方によれば台形石器
にも見える。粗い調整剝離であるが、均整はとれている。

①角錐状石器

2.9×1.2×0.7　1.8ｇ

黒曜石

弧状に反り返った横剝ぎ剥片を素材としている。
二面を加工した小型品である。加工は、粗い。
調整剝離は、主に裏面からで稜上からもわずか認められる。
先端は鋭く尖り、稜上の下半に素材面を残している。

①クサビ形石器
3.7×4.6×1.3　24.2ｇ
安山岩
裏面には、原石面がある。
両極打法によるクサビ形石器と思われる。

②クサビ形石器
3.3×4.0×1.0　14.1ｇ
粘板岩
両極打法によるクサビ形石器と
思われる。裏面中央の平面は、
層理面である。石材的に見れば、
旧石器時代の遺物の可能性は低い。

剥片 KOUZAKI　2B

①剥片
5.2×3.0×1.0　10.2ｇ
頁岩
縦剝ぎの剝片である。
右側面は原石面である。

②横長剥片
7.2×2.9×1.5　27.8ｇ
安山岩
正面の左側縁の基部に加工がある。
基部加工のナイフ形石器の可能性がある。
風化は著しく、平行線の朽木模様が認められる。

③石刃状剥片
7.4×3.8×1.6　41.7ｇ
頁岩
上半部の欠損は、新しいものである。
元は、10ｃｍ位あったものと思われます。
これだけ大きなものは、本地域では
珍しい。

④縦長剥片
4.7×4.1×1.2　15.8ｇ
安山岩
中央に稜線のある縦剝ぎ剥片である。
上部の欠損は、古いものである。
左側縁に使用痕が認められる。

⑤縦長剥片
6.0×2.8×1.1　19.0ｇ
安山岩
中央に稜線のある縦剝ぎ剥片である。
左側縁の上半部と右側縁の下半部に
加工がある。スクレパーの加工か使用痕
かの判断は難しい。風化は、針でつついた
小さな穴が無数にあるような表面である。
水分で何かの成分が溶け出したものかもしれません。
ガラス質安山岩の風化に良く似ていますが、縁辺が鋭い。

⑥剥片
2.3×3.7×0.6　4.6ｇ
安山岩
横剥ぎ剥片である。
火を受けて、変色している。

⑦剥片
3.9×4.5×1.0　19.2ｇ
頁岩
稜線のある縦剝ぎ剝片である。
下部の欠損は古いものですが、
元はもう少し長かったものと思われます。

⑧石刃状剥片
4.4×1.9×0.6　5.5ｇ
ガラス質安山岩
風化が著しい。
二島幸崎と書かれていますので、
高橋慎二さんの資料と思われます。
なぜ実測図がないのか、わかりません。

⑨縦長剥片
5.4×4.2×1.0　19.2ｇ
石材不明
赤間石の色を薄くした色合いの石材で艶はない。
モノクロの写真から修整したものですが、どこと
なく似ている。この石材は、これ以外にはない。
正面に稜線のある、幅広の縦剝ぎ剝片である。
左側縁から下端部にかけて原石面がある。

モノクロ写真の修整

⑩剥片
3.7×1.8×0.7　3.5ｇ
流紋岩
縦剝ぎ剝片である。
右側面に原石面がある。
これと同じ石質と思われる下記の剝片の
裏面に流離構造があったからである。

⑪剥片

3.9×2.4×0.4　3.8ｇ

流紋岩

裏面に流離構造が認められる剥片。

⑫剥片

3.3×4.8×0.8　11.8ｇ

安山岩

横剥ぎ剥片である。

縁辺には、新しい割れがたくさんある。

小さな割れが多いが、左端の欠損は大きい。

⑬剥片

4.0×4.7×1.4　24.0ｇ

頁岩

横剥ぎ剥片である。

下部側面と打面に原石面が残る。

⑭剥片

2.5×3.6×0.8　9.2ｇ

黒曜石

現状は、横長の剥片であるが、

目的は、縦長剥片を意図したものである

⑮加工痕のある剥片

2.1×1.6×0.3　1.5ｇ

頁岩

左側縁は、新しい割れで先端部もわずか欠損している。

下端部は古い割れで、まだ長かったものと思われます。

右側縁の先端に、押圧剥離の加工痕がわずかあります。

⑯剥片
5.2×2.4×0.8　7.5ｇ
安山岩
実測図では、ナイフ形石器に見えるが
記憶では使用痕のある剥片と思われる。
正面の左側縁の剥離は、横剝ぎ剥片を取る際に
出来た打撃痕である。ナイフでない理由は、
打撃痕の数と、裏面の右側縁の剥離数が同じ
で、刃潰しが裏面からの加工ではない。
正面の右側縁の剥離もナイフの基部加工には見えない。
横剝ぎ剥片である。

モノクロ写真の修正

⑰剥片
4.1×2.2×1.0　9.8ｇ
赤間石（輝緑凝灰岩）
縦剝ぎ剥片である。正面と裏面では風化の具合が
違うので、正面は原石面かもしれない。
石材は、良質である。山口市や防府市では、
赤間石の利用は極めて少ない。宇部洪積台地では、
旧石器～縄文早期の時代に利用される。

⑱剥片
5.0×4.7×1.2　36.1ｇ
石材不明
幅広の縦剝ぎ剥片である。
風化が著しい。
このような石質のものは、南方遺跡
にもありました。採集するべきか
迷うものです。石器が見つかれば
展開も変わっていたかもしれません。

⑲剥片
2.8×2.2×0.7　5.6ｇ
安山岩
縦剝ぎ剥片である。
下端部の欠損は、新しい割れである。

⑳剥片

4.5×4.1×1.0　18.5ｇ

黒曜石

上端部は、見かけ欠損部に見えるが
三分の二は原石面である。虫食い状の
原石面の影響が、裏面までにも認められる。
右側縁に、加工痕らしきものが認められるが
新しい割れもあり、よりわかり難くしている。

㉑剥片

2.0×1.8×0.5　2.1ｇ

チャート

2 色が、きれいに分かれているチャートは珍しい。
右側縁は、垂直素材面である。
正面に稜線のある縦剝ぎ剝片である。

㉒剥片

2.7×2.5×0.8　5.7ｇ

安山岩

風化が著しい。
裏面に白い斑晶が見られる。

㉓小石刃核片

2.5×1.7×0.9　2.7ｇ

ガラス質安山岩

小石刃核の破片と思われる。

㉔剥片

2.4×1.1×0.3　0.8ｇ

黒曜石

右側縁と下端部に原石面がある。
縦剝ぎの剝片であるが、細石刃ではない。
左側縁には、新しい割れがある。

㉕剥片

2.9×1.6×0.4　2.4ｇ

石材不明

左側縁・下端部・右側縁にかけての周囲に原石面がある。
縦剝ぎ剝片である。上端は、古い割れでまだ長かった
ものと思われます。

幸崎遺跡 3 地区　緯度経度①34.034632　131.408878　②34.034548　131.408531

本遺跡は山口市秋穂二島南に所在する。宮山と権現山が連なる尾根上にある洪積台地で、周防大橋の東方 1.4ｋｍに位置する。二島地区と南地区を繋ぐ道の峠にあたり、峠の西側に遺跡があり標高は 15ｍである。3 地区と 4 地区の間は谷筋で、現在は池があるが古代の水の便は良かったと考えられる。①の地点は尾根の中央部で、ナイフ形石器などの旧石器時代の遺物が多く発見された。②の地点は細石刃の集中地点で、発掘では細石核も発見された。遺物は多く宇部洪積台地の旧石器を考える上に重要な遺跡である。旧石器時代の遺物の他に石斧・摘み付スクレーパー・石鏃・滑石製紡錘車・滑石製臼玉が発見されている。

ナイフ KOUZAKI　3

①ナイフ形石器
4.1×1.9×0.9　5.8ｇ
安山岩
典型的な切り出し型ナイフ形石器である。
遺跡の西端域で採集したもので、遺物は
極端に少ない場所である。

②ナイフ形石器
3.9×1.8×0.9　4.5ｇ
安山岩
横剝ぎ剝片を素材としている。
部分加工のナイフ形石器である。
右側縁の基部のみを加工を施して、その上方は
三角状突帯をなした素材面を残している。

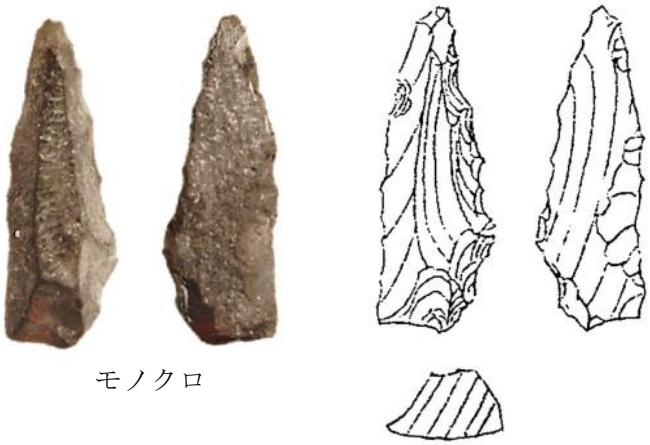
③ナイフ形石器
2.9×1.4×0.7　3.6ｇ
安山岩
二側縁加工のナイフ形石器である。
刃部側の加工は、印程度の簡単な剥離である。

④ナイフ形石器
3.1×1.3×0.6　2.7ｇ
安山岩
正面右側に原石面が残る。
先端部の欠損は、新しいものである。
二側縁加工のナイフ形石器で、調整剥離は
丁寧である。

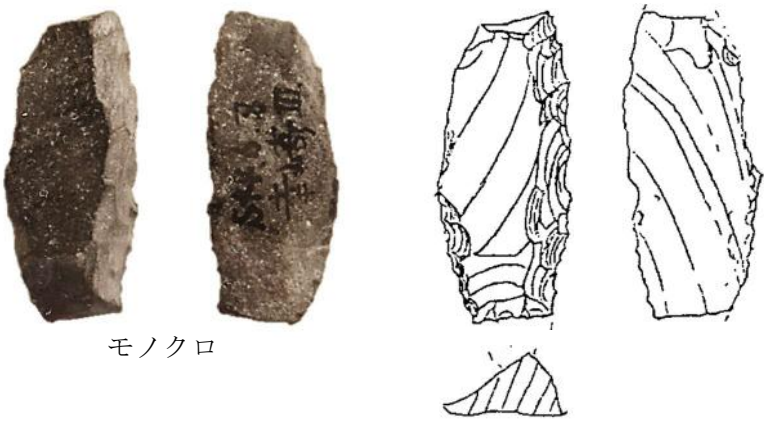
⑤ナイフ形石器
4.5×2.2×0.5　4.7ｇ
安山岩
先端部の欠損は古いものであるが、
これ以上に大きいものか想定はできない。
部分加工のナイフ形石器であるが、
左側縁の垂直素材面は刃潰し加工の省略と
考えられるので、二側縁加工のナイフ形石器と
変わるところはない。右側縁は刃部と基部加工
からなる。

⑥ナイフ形石器
2.0×1.3×0.4　1.3ｇ
安山岩
先端部は、もう少しあったようである。
一側縁加工のナイフ形石器である。
右側縁の末端部は切断面で、刃潰し調整の
省略と考えられる。

⑦ナイフ形石器
4.1×1.4×0.8
安山岩
一側縁加工のナイフ形石器である。

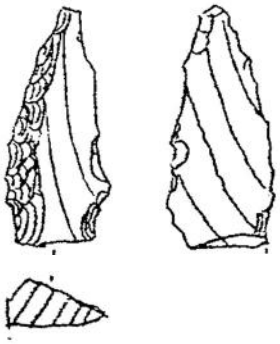


⑧ナイフ形石器
3.9×1.7×0.8
安山岩
先端部は、欠損している。
二側縁加工のナイフ形石器である。



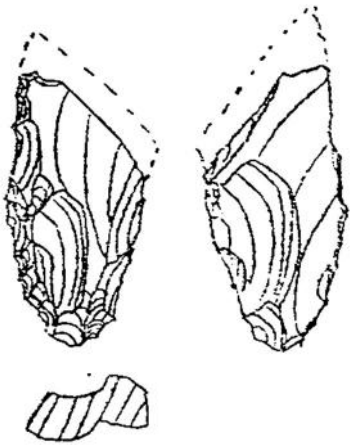
⑨ナイフ形石器
3.1×1.3×0.5
安山岩
基部は、欠損している。
二側縁加工のナイフ形石器である。

モノクロ



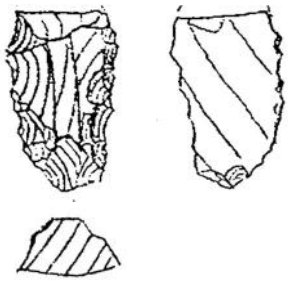
⑩ナイフ形石器
3.5×1.7×0.6
安山岩
先端部は、欠損している。
二側縁加工のナイフ形石器である。

モノクロ



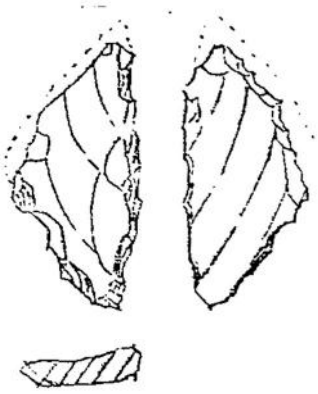
⑪ナイフ形石器
2.3×1.3×0.8
安山岩
先端部は、欠損している。
二側縁加工のナイフ形石器と思われますが、
角錐状石器の可能性も残しています。

モノクロ



⑫ナイフ形石器
3.4×1.6×0.4
安山岩
切り出し型ナイフ形石器のようである。
特に、刃部に新しい割れが多い。

モノクロ



⑬ナイフ形石器
1.7×1.1×0.6
安山岩
二側縁加工のナイフ形石器である。

縮尺率 150%

⑭ナイフ形石器
4.0×1.1×0.6　2.7 g
ガラス質安山岩
部分加工のナイフ形石器である。
右側縁の先端部の加工は中ほどまで進み、加工の終わりとは
思えないような、不自然な剥離で止めている。不自然な剥離は、
使用時のアクシデントで出来た割れかもしれない。
左側縁は基部加工で、刃部には使用痕がある。
右側縁の下半部は、加工はなく刃部のままなので、
直接に手で持って使用するものではないことがわかる。

⑮ナイフ形石器
3.3×1.2×0.8　3.6 g
ガラス質安山岩
左側縁は、原石面である。
右側縁は、基部加工と刃部である。
部分加工のナイフ形石器であるが、
原石面を刃潰しの代わりに利用しているので、
実際は二側縁加工のナイフ形石器と同じである。

⑯ナイフ形石器
2.5×1.1×0.4　1.4 g
ガラス質安山岩
先端部の欠損は、古いものである。
二側縁加工のナイフ形石器である。
調整剝離は、細かく丁寧である。

⑰ナイフ形石器
2.8×1.5×0.5　1.9ｇ
ガラス質安山岩
先端部の欠損には、古いものと新しい割れがある。
切り出し型ナイフ形石器である。調整剥離は、丁寧である。
抉りのある調整剥離は、狸谷型ナイフ形石器に似ている。

⑱ナイフ形石器
2.6×1.5×0.5　1.8ｇ
ガラス質安山岩
末端部の欠損は、古いものである。
一側縁加工のナイフ形石器が、想像される。
調整剥離は、細かく丁寧である。

⑲ナイフ形石器
2.1×1.8×0.6　2.3ｇ
ガラス質安山岩
先端部の欠損は、新しい割れである。
切り出し型ナイフ形石器と思われる。
調整剥離は、丁寧である。
左側縁の加工は、非常に細かい。

⑳ナイフ形石器
2.9×1.2×0.6　2.1ｇ
ガラス質安山岩
切り出し型ナイフ形石器である。
大きな調整剥離である。

㉑ナイフ形石器？
4.4×2.3×0.8　6.8ｇ
ガラス質安山岩
左側縁の先端部に、わずか加工が認められるが、
ナイフ形石器かわからない。

㉒ナイフ形石器
1.6×0.9×0.3　0.5ｇ
ガラス質安山岩
末端部の欠損は、古いものである。
右側縁に、細かな調整剥離が認められる。

㉓ナイフ形石器
2.3×1.0×0.4　0.9ｇ
黒曜石
先端の割れは古く、末端は新しい割れである。
先端の割れは、前方からの衝撃であることが
裏面先端の割れからわかる。
二側縁加工のナイフ形石器である。
細かな調整剥離である。

㉔ナイフ形石器
2.2×1.2×0.5　1.4ｇ
黒曜石
先端部の割れは、古いものと新しいものが混ざり、
一様ではない。左側縁は、垂直素材面に近いもの
で、わずか剥離がある。右側縁の基部は、正面から
の調整剥離で細かい。刃部には、使用痕が認められる。
裏面の右側縁にも、使用痕位の剥離が認められる。
剥離は、使用痕を含めて縁辺を一周している。
ナイフ形石器ではない可能性もある。

㉕ナイフ形石器
2.7×1.7×0.4　2.5ｇ
黒曜石
以前は、台形石器に入れていたものであるが
良く調べて見ると、部分加工のナイフ形石器である。
調整剥離は、主に上端部にあるが下端部にもわずか
認められる。縦剝ぎ剝片を素材として、両側縁には
使用痕が認められる。

㉖ナイフ形石器
2.3×1.1×0.6　1.6ｇ
黒曜石
左側縁は、大きな調整剥離で厚みがある。
一側縁加工のナイフ形石器である。
右側縁は、刃部である。

㉗ナイフ形石器
1.8×2.0×0.4　2.2ｇ
黒曜石
縦剥ぎ剥片を素材としている。
先端部の欠損は、新しい割れである。
一側縁加工のナイフ形石器で、調整剥離は
丁寧である。

㉘ナイフ形石器
0.9×0.8×0.2　0.2ｇ
黒曜石
先端と基部が欠損しているナイフ形石器
である。欠損は、古い割れである。
調整剥離は細かく丁寧で、刃部は薄く鋭い。

縮尺率　200%

㉙ナイフ形石器
3.5×2.1×1.1　6.3ｇ
水晶
形は、切り出し型ナイフ形石器と思われる。
調整剥離は大きくて数は少ないが、
先端部が欠損しているので全てはわからない。
遺跡の東端域（峠の側）で採集したもので、
遺物は極端に少ない場所である。

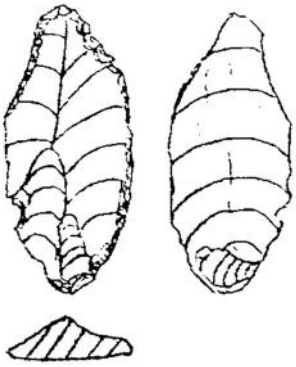
㉚ナイフ形石器

3.6×1.6×0.5

水晶

縦剝ぎ剝片を素材とした木葉型のナイフ形石器である。
周縁に細かな調整剝離があった記憶と実測図は一致する。
実測図から見ると二側縁加工のナイフ形石器である。
水晶の石質は、完全に透明なものではなく少し白み
がかった半透明のものだったと記憶しています。

モノクロ



㉛ナイフ形石器

2.3×1.2×0.2　0.8ｇ

赤チャート

二側縁加工のナイフ形石器である。
形は、菱形を意識した作りで、
調整剝離は、細かく丁寧である。

㉜ナイフ形石器

3.1×1.9×0.5　3.6ｇ

頁岩

末端部の欠損は、新しいものである。
横剝ぎ剝片を素材としている。
調整剝離は、裏面からの大きな剝離である。

㉝彫器かナイフ形石器？

4.1×1.9×0.7　6.2ｇ

安山岩

ナイフ形石器と見るか、彫器と見るか
である。樋状剝離か、はっきりしない。
ナイフ形石器だとしても、左側縁が両面加工で
刃潰しでない点が問題である。これと似たような
石器が中道遺跡で発見されている。ナイフ形石器の
意見が多い。

彫器 KOUZAKI　3

①彫器

3.2×1.4×0.9　4.1ｇ

安山岩

上部は、もう少しあったようである。

見かけはナイフ形石器に見えるが、良く見ると

2ｃｍある樋状剥離の先端部を囲むように

調整剥離が行われていることがわかる。

角錐状石器 KOUZAKI　3

①角錐状石器

3.9×1.3×0.9　4.1ｇ

黒曜石

均整のとれた二面加工の角錐状石器である。

調整剥離は、主に裏面からである。

加工は、粗いが丁寧である。

稜上の末端部に、素材面を残している。

その傾向は、二面加工の角錐状石器に良く認められる。

②角錐状石器

3.4×1.3×0.9　3.0ｇ

安山岩

裏面の下半部が、大きく欠損している。

三面加工の角錐状石器である。

正面左側面の調整剥離に比べて、右側面は極めて粗く

見える。欠損しているので詳細はわからない。

③角錐状石器

4.9×2.3×0.9　10.5ｇ

安山岩

縦長剥片を素材としている。

加工は、極めて少ない。

角錐状石器の部類に入るものか

疑問であるが、古代人は加工より

形を優先する考えがあるので

角錐状石器として置きたい。

遺跡の東端域（峠の側）で採集したもので、

遺物は極端に少ない場所である。

①台形石器

1.6×1.4×0.4　0.8ｇ

黒曜石

稜線のある縦剝ぎ剝片を素材としている

刃部や裏面のリングの流れが真っ直ぐでないので、

素材剥片は平行縁を持つ石刃素材とは思われない。

形は、完全な台形ではない。調整剝離は両側縁と

上縁部の三箇所で、加工は細かく丁寧である。

②台形石器

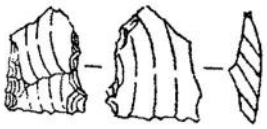
1.3×1.0×0.4

黒曜石

急激に幅が減少する縦剝ぎ剝片素材で

中央に稜線がある。

両側縁に調整剝離がある。



③台形石器・石鏃の未製品？

1.5×1.8×0.5　1.4ｇ

黒曜石

右側縁は、裏面からの小さい調整剝離が

認められる。上端部と左側縁は、大きな剥離

で剥離方向も一様でないので素材面かもしれない。

その裏面には、薄い押圧剝離が認められる。

見方によれば、石鏃の未製品とも考えられる。

④台形石器か石鏃？

1.5×1.6×0.3　0.8ｇ

安山岩

台形石器に入れてあったものですが、

石鏃かその未製品の可能性が高いと思われます。

上の写真を見れば台形石器のようにも見えます。

左側縁は、刃潰しなので問題ないのですが、

右側縁は、押圧剝離です。写真ではわかり難いのですが、

押圧剝離の裏面にもわずか押圧剝離があります。

それは、両面加工を意味しています。裏面には、

その他に使用痕的な細かな剝離も認められます。

縮尺率 150%

⑤台形石器と言うより石鏃の未製品では
1.4×0.5×2.0　1.2ｇ
安山岩
素材剥片は、一方が厚く一方が薄い上記③と似た剥片である。正面と裏面の縁辺にかなりの押圧剥離が認められる。石鏃の未製品と思われる。

火打石 KOUZAKI　3

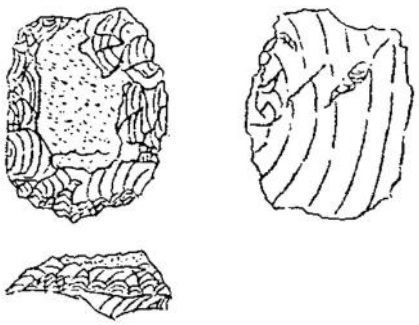
①火打石？
2.4×2.3×0.9　5.8ｇ
チャート
以前は、台形石器に入れていたものである。
調整剥離は、上端部を除き全側縁に認められる。
特に、左側縁と下端部の加工は刃潰し状の細かい剥離である。見かけは掻器に似ているが、裏面の薄い剥離は不自然で、火打石を使用した時にできたものではないかと想像される。

スクレパーKOUZAKI　3

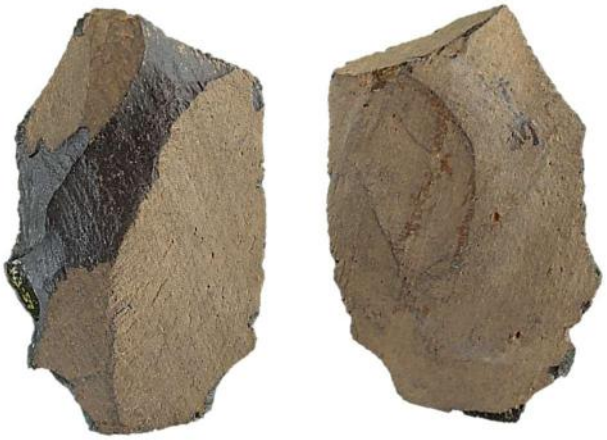
①スクレパー
3.4×2.2×0.8　5.7ｇ
黒曜石
末端部の欠損は、古いものである。
縦剥ぎ剥片を素材としている。
右側縁には、押圧剥離の加工があるので
スクレパーと思われる。
左側縁の上半部には、使用痕がある。

②スクレパー
2.4×3.0×1.0　5.5ｇ
チャート
右側面は、新しい割れなので、もう少し大きかったものと思われる。
下部側縁は抉入スクレパーで、上部側縁はスクレパーです。

①掻器
2.7×2.0×0.8
チャート
中央に原石面が残る。



①縦長剥片
5.3×3.3×1.2　19.4 g
安山岩
下端部は、古い欠損です。
裏面には、大きなバルバースカー（打瘤裂痕）とバルブ（打瘤）が残る。大きく強い加撃が加えられたことがわかる。



②縦長剥片
3.1×1.7×0.5　2.4 g
黒曜石
左側縁に原石面が残る縦剝ぎ剥片である。

③縦長剥片
4.0×2.0×0.4　2.7 g
黒曜石
縦剝ぎの剥片である。
両側縁に、わずか使用痕がある。

④剥片
2.4×4.0×0.6　5.9 g
安山岩
横剝ぎ剥片である。

⑤縦長剥片
3.0×1.5×0.6　2.3ｇ
黒曜石
右側面に、原石面のある縦剝ぎ剥片である。

⑥剥片
3.5×2.0×1.0　8.3ｇ
水晶
上端部に、1.5ｃｍの樋状剥離痕のある剥片である。
両側面に大きな剝離もあるが、ナイフ形石器とは
考え難い。両極打法で、出来た剥片かもしれない。

⑦剥片
4.0×1.9×0.6　4.4ｇ
ガラス質安山岩
縦剝ぎ剥片である

⑧剥片
3.1×2.0×1.0　8.5ｇ
安山岩
裏面が原石面（円礫）である。

⑨剥片
3.1×2.5×0.5　4.0ｇ
硬質頁岩
縦剝ぎ剥片である

⑩剥片
4.5×3.7×1.2　16.9ｇ
頁岩
縦剝ぎ剝片である。
裏面の右下端部に押圧剥離がある。

⑪剥片
3.7×4.4×1.0　20.6ｇ
チャート
幅広の縦剝ぎ剝片である。
下端部の欠損は、新しい割れである。

①2.4×0.9×0.3
0.7ｇ

②2.1×0.7×0.4
0.9ｇ

③1.9×0.6×0.2
0.3ｇ

④1.2×0.8×0.2
0.2ｇ

⑤1.5×0.8×0.2
0.3ｇ

⑥1.5×0.7×0.2
0.2ｇ

⑦1.5×0.8×0.2
0.2ｇ

⑧1.8×0.6×0.2
0.2g

⑨1.6×0.9×0.2
0.3ｇ

⑩1.2×0.8×0.2
0.2ｇ

⑪1.1×0.9×0.2
0.2ｇ

⑫1.9×0.9×0.2
0.4ｇ

⑬1.3×0.7×0.2
0.2ｇ

⑭2.0×0.9×0.3
0.6ｇ

⑮1.3×0.4×0.1
0.1ｇ

⑯1.5×0.7×0.3
0.2ｇ

⑰1.5×0.8×0.3
0.4ｇ

⑱1.0×0.4×0.1
0.1ｇ以下

⑲1.6×0.5×0.2
0.2ｇ

⑳1.0×0.6×0.1
0.1ｇ

㉑1.0×0.5×0.2
0.1ｇ

㉒1.0×0.8×0.1
0.1ｇ

㉓1.1×0.6×0.1
0.1ｇ

㉔1.2×0.7×0.1
0.1ｇ

㉕1.0×0.5×0.1
0.1ｇ

㉖1.0×0.8×0.3
0.2ｇ

㉗0.8×0.9×0.2
0.2ｇ

㉘1.5×0.6×0.1
0.1ｇ

㉙1.0×0.9×0.1
0.1ｇ

㉚0.9×0.6×0.1
0.1ｇ

㉛1.1×0.8×0.1
0.1ｇ

㉜0.9×0.7×0.1
0.1ｇ

㉝1.4×0.9×0.2
0.2ｇ

㉞1.6×1.2×0.6
0.6ｇ

㉟1.5×0.9×0.3
0.4ｇ　安山岩

㊱2.1×0.7×0.3
0.4ｇ　ガラス質安山岩

①～㉞黒曜石

「細石刃について」

細石刃の大きさは、宇部市南方遺跡で 220 点の平均値・長さ 1.31ｃｍ・幅 0.675ｃｍ・厚さ 0.181ｃｍが報告されている。南方遺跡と長桝遺跡 1 地点を合わせて 600 点余りの細石刃が発見されているが、長さ 3ｃｍを超えるものは長桝遺跡 1 地点の 1 点のみである。

畑の表面にある細石刃は、一次包含層から遊離して二次散布したものである。縦の遺物移動はあっても、横の移動は少ないことが表面採集の経験からもわかります。少し大きな石（遺物）は、畑の邪魔になるので良く端に投げることがあります。横の移動が加わり三次散布になりますが大きな移動ではありません。

①の細石刃は、上端部が欠損していて 3ｃｍ位あったものと思われます。上記のことを考慮すると、細石刃であるか難しいところです。採集場所がわからないのが残念です。⑬以降は、細石刃屑がほどんどです。㉗㉚㉛は、細石刃の分割屑の可能性があります。㉞は、細石核屑です。㉟は、安山岩です。確かに他の遺跡でも安山岩製の細石刃は存在しますが、はっきりとした安山岩製細石核が発見されていない現在は、信用することは出来ませんので保留です。㊱は、ガラス質安山岩です。細石核から剝がれたものか微妙なところですが、細石核の数に比べ非常に細石刃が少ないのが現状です。

幸崎遺跡 4 地区　緯度経度①34.036446　131.408909　②34.035648　131.408485

本遺跡は山口市秋穂二島二島に所在する。宮山の東にある洪積台地で、周防大橋の北東1.4ｋｍに位置する。東西を池で挟まれた舌状台地（標高 15m）の周りの池はむかしの谷筋と考えられる。3 地区の隣にあり、遺物は台地の縁辺に散在する。昭和 43 年当時は、4 地区でなく 3 地区の「離れ」とか「離れ小島」と呼んでいた場所で 3 地区の一部と思っていた。3 地区の①の地点からすぐに行ける小さな路が池の側の林にあったこともひとつの理由かもしれない。旧石器時代の遺物は整理されていたが石鏃が 3 地区と混ざったことが今にして見れば残念である。

ナイフ KOUZAKI　4

①ナイフ形石器
3.8×1.3×0.9　4.2ｇ
安山岩
横剝ぎ剥片を素材としている。
部分加工のナイフ形石器である。
左側縁は垂直素材面で、先端部のみ加工を
施している。右側縁の基部加工は、形を整える
だけの小さな調整剝離である。

②ナイフ形石器
2.9×1.8×0.7　3.0ｇ
安山岩
風化でわかり難いが、横剝ぎ剝片を素材と
していると思われる。右側縁の調整剝離は粗く、
左側縁は、新しい割れでわかり難い。
刃部は、新しい割れで想像できない部分があるが、
切り出し型のナイフ形石器と思われる。

③ナイフ形石器？
4.1×2.2×1.3　12.2ｇ
安山岩
横長剝片を素材としている。
調整剝離は、粗い。
左側縁は刃潰し状で、右側縁は
押圧剝離気味に、剝離が反対まで到達
している。先端部は古い割れで、形が
想像できないのが残念である。
角錐状石器の可能性もある。

④ナイフ形石器
2.5×1.5×0.6　2.0ｇ
黒曜石
先端部は新旧の割れで欠損しているが、
二側縁加工のナイフ形石器と思われる。
横長の剝片を素材としている。
調整剝離は、丁寧である。

⑤ナイフ形石器
2.2×1.0×0.4　1.1ｇ
黒曜石
縦長剝片を素材とした、小型のナイフ形石器である。
調整剝離はかなり雑で、左側縁の基部には正面からの
剝離も認められる。基部加工のナイフ形石器で、その他の
縁辺の細かな割れは使用痕と理解すれば納得できる。
先端部の割れは末端からの打撃で出来たもので、
裏面末端には打撃の時にできた割れがある。

裏面先端部拡大

⑥ナイフ形石器
2.9×1.8×0.6　2.8ｇ
黒曜石
横剝ぎ剝片を素材としている。
右側縁は、入念な調整剝離を施している。
左側縁は、一次剝離の打面のままで調整剝離はない。
刃部の使用痕は、硬いものでも当たり表裏が剝離した
大きな一つの割れがある。黒曜石は、真っ黒で艶のある
石材である。

⑦ナイフ形石器
1.5×1.4×0.5　0.9ｇ
水晶
先端部は、欠損している。
小型の切り出し型ナイフ形石器と思われる。

縮尺率　200％

①剥片

3.9×1.5×0.5　3.3ｇ

ガラス質安山岩

縦剝ぎ剝片である。先端は、わずか欠損する。
縁辺の一方が垂直素材の剥片で、ナイフ形石器の
素材剥片である。このような素材剝片は、横剝ぎ
でも認められる。垂直素材面の加工は、基部か
先端部に限られ全体を剥離しないのが通常である。
また、垂直素材面の加工をしないで、一側縁の
基部加工だけのものもある。垂直素材面イコール
刃潰し的感覚が古代人にはあったと思われる。
また、垂直素材面のある剥片が偶然できたことは
考えられないので、剝片剝離技術が存在したと思われる。
両極打法かもしれない。

②縦長剝片

6.8×3.7×1.4　38.5ｇ

安山岩

中央に稜線のある幅広の縦剝ぎ剝片である。
縁辺には、たくさんの新しい割れがある。
本地域では、最大クラスのものである・

③縦長剝片

3.8×1.9×0.9　7.1ｇ

安山岩

縦剝ぎ剝片である。
正面の中央の稜線上に原石面が残る。

①剥片石核
2.9×2.3×1.5　9.2ｇ
安山岩
打面が原石面の剥片石核
である。

昭和 43 年頃の幸崎遺跡 3 地区です。農道の右側が遺跡で、宮山の山麓緩斜面まで遺跡は続きます。左端に墓地と林が見えますが、そのあたりの畑から宮山の麓にかけて遺物が多く散在します。

宇部洪積台地の旧石器の最大の特徴は、ガラス質安山岩の利用

他県の人から見ると、姫島産のガラス質安山岩が非常に珍しいものらしい。山口県にいると、いつも見かける石材なのでそれがわからない「井戸の中のカエル」である。姫島は大分県にあるので、みかけは遠距離石材に見えますが、宇部台地から 40～50ｋｍで旧石器人の行動範囲にある石材です。ガラス質安山岩の利用は、安山岩や黒曜石の影に隠れてぼやけた存在ですが、見方によれば安山岩や黒曜石の利用を上回るものかもしれません。安山岩や黒曜石は、複数原産地の評価であり、姫島産のガラス質安山岩は、単一原産地での評価であることです。ナイフ形石器の石材別利用率を参考に、単一原産地で比較すると姫島産のガラス質安山岩が最も利用された石材になると考えられられます。

終わりに

幸崎遺跡で見えるもの見えたもの

幸崎遺跡の幅広大形縦長剝片

幸崎遺跡には、幅広で大形の縦長剝片が存在する。
幸崎遺跡 2Ｂ地区の頁岩製の剥片③や 4 地区の
安山岩製の剥片②である。
幅広で大形の縦長剝片を利用しているものは、
剝片尖頭器やスクレパーなどである。素材剝片を大きさは、
石器の大きさに反映していると思われますので、
大型剝片尖頭器や大型スクレパーの時代のものと
考えられないでしょうか。

③7.4×3.8
2B 地区

②6.8×3.7
4 地区

縮尺率 50%

垂直素材面を持つ剝片や原石面を利用した部分加工のナイフ形石器

垂直素材面を持つ剝片や原石面を利用した
部分加工のナイフ形石器が存在する。
刃潰しを一部省略したもので、旧石器人の
寛容さがうかがわれる。
垂直素材面を持つ剝片は、横剥ぎ剥片の打面
と両極打法による剝片の一部と折断による
ものが考えられます。台形石器の折断面の
利用に似たところがあります。

4.5×2.2
3 地区

3.9×1.8
3 地区

3.3×1.2
3 地区

3.8×1.3
4 地区

切り出し型ナイフ形石器の 3 タイプ

A タイプ　正面基部の平坦部がないタイプ
B タイプ　正面基部の平坦部が狭いタイプ
C タイプ　正面基部の平坦部が広いタイプ

A

B

C

幸崎遺跡・山口県山口市

令和 3 年（2021）9 月 30 日発行

防府考古学研究会　三浦文夫